



Medical Excellence JAPAN 理事長

近藤 達也

こんどう・たつや 東大医卒、国立国際医療センター病院長などを経て、08年医薬品医療機器総合機構（PMDA）理事長。「レギュラトリーサイエンス」（規制科学）を推進し、わが国の医療改革に貢献。19年から現職。77歳。

世界の健康調和に向けて

時間軸定め 4次元の改革を

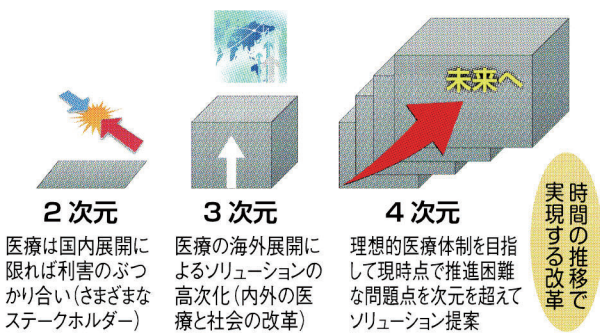
講壇

新型コロナウイルスが世界中を震撼させている。世界的にその対応はアカデミアも含めて混沌とした状況だ。感染症ブレイクの危険性と社会的影響の重さを再認識するとともに、国際的かつスマートな協働が求められる、日本はその中で先進国としての明確で医学的判断と公衆衛生的な指導性が求められる。

さて、日本は1996年に始まった1億2000万人の人口をカバーする国民皆保険により、世界最先端の医療が公平に、かつスピード感をもって施される、世界で最も進んだ国家である。米国も同様であるが、享受できる国民は限られている。欧州も、もちろん最先端医療を誇る地域であり、皆保険の先達であることは間違いなく、医療におけるスピード感に欠落していると考え

Evolutional Medical Development Goals 4次元の医療改革

レギュラトリーサイエンス視点で統合的な改革を各業界一体となって推進



に開発され医療現場で使用されるようとする過程で、国民にとってこれが保障されるような国家こそが信頼の要となると考えれば、どのように体制を維持するかが問われてくる。

医療費の財源の確保、地域医療体制の崩壊の危機、医学教育基盤の歪み、卒後医学教育、専門医制度、医学研究を支える基盤の脆弱化、医療イノベーションへの基盤など喫緊の課題が山積している。日本が先進国としてこの前衛の医療分野でさらに世界で貢献するためには、問題点を洗いざらい列挙し、マップングし将来に向かって鋭意、改革を続けなければならない。

患者目線のみならず国民目線で未来の医療のあるべき姿を想起し、複雑に問題点が入り組んだ医療体系を産業界も含めたステークホルダーとともに合理的に調整してゴール設定することが求められる。これらの問題点は一つひとつ切り出しても単独では解決できないものばかりである。従って、総合的に分析しながら解決することが求められている。

MEJはこの観点に立ち、Rational Medicine（患者中心の合理的な医療を目指そう）、「レギュラトリーサイエンス」を駆使して、日本の医療を国内中心の2次元の世界から、世界の医療との交流を強化する3次元の世界へ、さらに将来の日本の医療のあるべき姿を目指した時間軸を定めた「4次元の医療改革」という理念を掲げ、そのハブ役として貢献していきたいと考える。

医療改革は、日本単独でなし得るものではない。各国と協力関係を構築しつつ、日本国民に将来の医療への希望を持たせ、国を挙げての医療の改革に加わってもらう必要がある。その上で、この過程を内外に発信することで、諸外国に日本の医療改革の方向性への理解を促しながら、より良い世界の健康を目指した調和に向けて努力していきたい。

（今回は早稲田大学政治経済学術院副学術院長の深川由起子氏です）